

PRESIDENT'S MESSAGE

RI 会長メッセージ



インスピレーションになる

ロータリアンの皆さま

職業奉仕は、定義するのは難しいかもしれませんが、説明するのは簡単です。端的に言えば、ロータリーと職業が重なり合うところ、つまり仕事を通じてロータリーの理念を実践するのが職業奉仕なのです。

海外で何年間も医療機関の管理運営に携わった後、バハマに戻った私は、母国が近代的な医療施設を切実に必要としていることに気付きました。当時の施設は時代遅れ、かつ不十分であり、必要な治療を受けるためには海外に行かなければならないことも多かったのです。アメリカで培った経験がなければ、私はその現状を変えるのは不可能だったでしょう。しかし、その経験がある私は、他の医療関係者と違って変化を起こすことができる立場にあったのです。職業を奉仕へとつなげ、バハマの医療改善に自分のキャリアをささげることができると考えました。

ロータリーが人生の一部になると、ロータリーの礎となった「力を合わせれば限界はない」というポール・ハリスの言葉が自分の職業人としての人生にも当てはまると悟りました。私一人でバハマに近代的な医療をもたらすことはできませんでした。しかし、のちに自分が経営する病院、ドクターズホスピタルでパートナーとなった医師たちと、何年もこの病院で働いてくれた熱意あふれる職員全員の力を合わせれば、どんな変化でも起こすことができました。私の目標はみんなの目標になり、現実となったのです。

ロータリーはあらゆる職業を尊重し、その価値を重んじます。創始者4人の中には医師や平和構築者はいなかったことを思い起こしてください。ロータリーを始めたのは普通の弁護士、鉱山技師、石炭商、洋服商でした。創立時からこうした多様な職業人が集ったことは、ロータリーにとって特別な強みとなりました。この多様性は、各クラブがそれぞれの地域で奉仕する事業や職業全般を反映することを目的とする職業分類の制度に表れています。

ポール・ハリスはかつてこう述べました。「ロータリアンのひとりひとりが、ロータリーの理想主義と自分の職業を結ぶ輪の役をするわけです」。当時、これは真実であり、また今でも同様に真実であるべきなのです。ロータリーの例会にかかる時間は毎週1～2時間ほどですが、ほとんどの人が週の大半を仕事に費やしています。ロータリーを通じて、こういった時間も奉仕の機会となります。それはつまり、同僚、従業員、そして私たちが奉仕する地域にとってインスピレーションとなる機会なのです。

BARRY RASSIN

2018-19年度 国際ロータリー (RI) 会長

原文 (英語) はこちらから

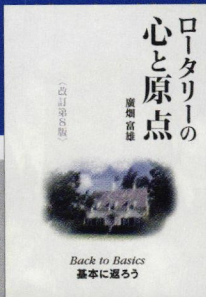
ロータリーの友

Home Page

www.rotary-no-tomo.jp

職業奉仕 Vocational Service とは何か

福岡西RC 廣畑 富雄



※『ロータリーの心と原点 Back to Basics 基本に返ろう』(第8版 2018年)より、
廣畑会員のロータリー情報委員長としての卓話部分を抜粋

問い合わせは(株)エムケイスペース
TEL: 092-737-9551
FAX: 092-737-9557

以下記すのは、ホームクラブでの、ロータリー情報委員長卓話です。それに若干手を加え書き直しました。職業奉仕と言うとどうしても誤解される。職業奉仕という言葉を使わずに、日本の初期のロータリー指導者たちが原語をそのまま使っていたように、ヴォケーション・サービスと言うように提案したいと思います。

皆さん今日は。ロータリー情報委員会の廣畑です。今日は4大奉仕の中の職業奉仕の話をしたと思います。ロータリーに4大奉仕〔注①〕がありますが、国際奉仕や社会奉仕はよくわかる。しかしクラブ奉仕と職業奉仕は分かりにくいと言われます。私もロータリーに入りたての頃、良く分からなかったですね。

職業を通じた奉仕活動なのだから、たとえば弁護士さんが、無料の法律相談をやる。あるいはお医者さんが、無医村に出かけて行って、無料で診療する、そういうのが職業奉仕かと思っていました。しかしロータリーの本を読むと、そういうのは立派な行為だけれども、職業奉仕ではなくて、むしろ社会奉仕だと書いてあります。あるいはロータリーの歴史を読むと、職業奉仕をしっかりとやって、会社が繁栄しきちんと利益が出るようになった、というような話が載っています。会社が本業をさておき、奉仕活動に一生懸命を出せば、会社が傾くのではないのでしょうか。毎日奉仕に精を出す、それでかえって利益が出る、そういう矛盾するような話が載っています。どうも分かりにくいですね。

職業奉仕が分かりにくいのは、ロータリーは無論米国で生まれたのですが、英語で言う“ヴォケーション・サービス vocational service”と、それを訳した職業奉仕の、概念の差によるものだと思います。だから日本の戦前のロータリーの指導者の方々は、奉仕という言葉は使わない。原語のサービスで押し通しておられます(米山さん、井坂さん、村田さん、初代から3代目のガバナーの月信を参照して下さい〔注②〕)。奉仕の意味を辞書で引くと(広辞林)、1. 仕えまつること、2. 自己の利害をはなれて長上の者や公共のためにつくすこと、と書いてあります。これではロータリーの職業奉仕にはなりません。お医者さんが無医村に行って無料診療をする、弁護士さんが無料の法律相談をする、そういう話になります。一方原語、英語のサービスはずっと概念が広くて、他のものた

めになる行為ですね(Done to help or benefit another or others)。

ですから一般の職業の方が、日常の業務の中での普通に行う職業活動の中での職業奉仕、ヴォケーション・サービス vocational service、ロータリーで考える意味での職業奉仕ができると思います。なお職業は英語でオキュペーション occupation と言いますが、職業奉仕に関しては、オキュペーションではなく、ヴォケーション vocation といいます。これは天職、天から与えられた、神様から与えられた、世の中のためになる職業です。

職業奉仕で有名なのはシェルドン〔注③〕です。彼はロータリーにサービスの概念を持ち込んだ人です。彼の有名なエディンバラの国際大会(第10回大会、1921年)でのスピーチがありますが、その中で職業奉仕の説明に、靴屋さんの例を引きます。世界中の靴屋さんが1か所に集まる。靴の製造器具とともに集まる。それが突然の天災で全部なくなったら靴なしで歩くことになる。はだして歩くのはたまりません。そのとき社会は、靴屋さんが如何に世の中に役立っているか、職業を通じたサービス(相手のためになる行為)をしているか分かるだろうと述べています。確かにそのように考えれば、どんな職業でも世の中の役に立っていると思います。

私の身近な医療の分野で、職業サービス(奉仕?)を考えてみます。医療において、病人、病む人の立場にたって医療をする。これは倫理的に大変望ましい立派なことであり、職業サービスです。そういう行為は、結果として、患者さんの信頼を得、多くの患者さんがその病院に集まり、その病院が繁栄するでしょう。東京の築地に聖路加国際病院があります。非常に評判の高い病院であり、いま高名な日野原重明さんは、ここのお医者さんです。日本中から患者さんが集まる。私が大学を出てすぐ聖路加で勉強していたころ、当時財界の総理といわれた、石坂泰三さん、皇太子妃になる直前の正田美智子様とか、多くの方が入院、あるいは受診しておられました。聖路加はキリスト教、聖公会の病院で、人々への愛を中心にすえ、患者さんの立場に立ってサービスする病院でした。それが病院の声価を高めた所以だと思います。

もう一つ例をとると、当クラブの会員で、職業奉仕委員長の方の会社、トヨタ自動車について考えてみます。自動車会社での職業奉仕とはどういうことか。良い車を、運転しやすい、安全な、ユーザーのためになる車を、又環境にやさしい車を、適正な価格で販売する。それが職業奉仕だと思います。仮に救急車などを寄付されるとします。それ

は立派な行為ですが、職業奉仕ではなくて、社会奉仕に入るでしょう。

ご承知の四つのテストがあります…1. 真実かどうか、2. みんなに公平か、3. 好意と友情を深めるか、4. みんなのためになるかどうか、この4つです。これが職業奉仕を具体的にあらわしています。後に R I 会長をするハーバート・テラー〔注④〕という方が、この四つのテストを考えた。彼は四つのテストを自分の会社の従業員に徹底し、倒産に瀕していた会社を立て直した、といわれています。たとえば、自分の会社の宣伝用ポスターを見直す。すると第一の、真実かどうかに反している。真実というと大げさですが、“Is it truth? 本当かどうか?”ということです。自分の会社で、宣伝が誇大で事実と違っていた、それを改める。競争相手の会社の製品の非難攻撃をしていた。これは第三の“好意と友情を深めるか”という点に反する。それで非難攻撃を止める。四つのテストをきびしく適用した結果、お客の信頼、信用を得、競争相手も好意的な態度に変わり、結局会社の発展につながった。そして破産寸前であった会社を立て直すことが出来た、と言われていました。その四つのテストが、どうしてロータリーと関係するようになったのか。テラーさんが後に R I の会長になり、四つのテストの版權をロータリーに譲られた。そして四つのテストは、ロータリーの重要な一部となりました。

四つのテストは、ロータリーの有名なモットー、アーサー・シェルドンの言う、“He profits most who serves best〔注⑤〕最も良く奉仕する者 最もよく報われる”という言葉と、基本的に一致するものです。戦前には、“最も良くサービスするもの、最もお金が儲かる”、という訳もあったようです。ただしロータリーでは、利益をあげようと思って職業奉仕をするではありません。天職を通じたサービス（職業奉仕）、相手のことを考え、皆のためになるように、そういう職業活動をする。それがビジネスの繁栄につながるという考えです。

以上職業奉仕は、ロータリアン全員が自分の天職を通じてできる行為であり、天職を通じて人のためになる行為であり、四つのテストに具体的に表されている。又あくまで倫理的な行為ですが、結果として、長い目で見れば、大きな利益につながるという事をお話しました。天職は、天から与えられた、神様から与えられた世の中のためになる職業ですが、ギャンブル、売春などを除き、すべての職業が天職であり、世の中のためになる職業です。自分の職業を大事に思い、職業を通じて世の中に貢献する、それが大切です。ロータリーには各界の指導的立場の方が入っていらっしゃる。もし皆さんが本当に職業奉仕に徹するならば、世の中もずいぶん良くなるのではないかと思います。一つの例をとれば、たとえばテレビ局の関係の方が、本当に世の中に役立つ映像を流しているのか、マイナスになる映像を、特に青少年にマイナスになる映像を流していないか、そういう点を振り返って頂くだけでも、世の中が良くなる

のではないのでしょうか。

後記 職業奉仕のこういう考え方は、ロータリーの専売特許ではない。戦後の日本で大成功を取めた実業家の書かれたものを読み、あるいはその追憶文を読むと、上に記した職業奉仕と同じ考えが述べられている。たとえば、ホンダの本田宗一郎さんは同じ考え方だし、松下電器の松下幸之助さんの考え方もそうだし、出光石油の出光佐三さんの考え方もそうである。

“ヴォケーションナル・サービス Vocational Service”を“職業奉仕”と訳すようになったのは、戦時中に職業を国に捧げる、命も国に捧げる、そういう雰囲気の中で生まれた。“御国に捧げん我等の生業（奉仕の理想の歌の一節）”という雰囲気である。

R I に長年中断していた“Vocational Service Committee、R I 職業サービス(奉仕)委員会”が出来て、2008年4月に最初の会議が開かれた。世界から6人の委員（日本からの委員は廣畑）が集まった。その審議と理事会への勧告につき、ロータリーの友誌、2009年1月号に報告文を書いた（横書き、p.16-17）。ご参考になるかと考える。

“サービス”についての、手続き要覧の記述（2001年版、p75）は明快である。

Rotary employs the word service in its broadest sense, referring not merely to the merchandise sold or work done in any business or professional transaction, but also to the giving of due consideration to the needs and to the circumstances of the one served and to the continual thoughtfulness of others.

ロータリーは、サービスという言葉、最も広い意味に使っている。ビジネスの商取引や専門職の行為（医療や弁護士の業務など）の場合にそうであるし、サービスを受ける側のニーズや状況に気を配り、常に他の人への思いやりの心を持つことである。

（第2700地区 福岡県 2005 - 06年度ガバナー）

注①：ロータリーの奉仕部門には変遷があります。当初は「クラブ奉仕」「職業奉仕」「社会奉仕」。これに「国際奉仕」が加わり「四大奉仕」に。次いで2010年の規定審議会で「新世代奉仕」が第5の奉仕部門として加わり、2013年の規定審議会で「新世代奉仕」は「青少年奉仕」に変わりました。

注②：米山梅吉氏（1928 - 1931年度）、井坂孝氏（1931 - 1933年度）、村田省蔵氏（1933 - 1935年度）。初代から3代目のガバナーです。

注③：アーサー F. シェルドン（1868-1935）初期ロータリーの指導的人物。国際ロータリー（R I）の第2標語の原型提示者。

注④：1954 - 55年度 R I 会長。

注⑤：2010年の規定審議会で「He Profits Most Who Serves Best」は「One Profits Most Who Serves Best」に改定。

「ロータリーの本質は職業奉仕」の真意とは

大村北RC 佐古 亮尊

営利行為の根底に友情を置くべし

「ロータリーの本質は職業奉仕にあり」とは、ロータリアンの誰もが口にするところです。では、その職業奉仕とはどんなことをする奉仕かと問えば、「自分の職業を生かして社会のために尽くすこと」と、型通りの返事が返ってくるのではないのでしょうか。

ところが、「ロータリーの目的」第2項には、「職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること」とあり、また、ロータリークラブ定款第6条の五大奉仕部門の第2には「奉仕の第二部門である職業奉仕は、事業および専門職務の道徳的水準を高め、品位ある業務はすべて尊重されるべきであるという認識を深め、あらゆる職業に携わる中で奉仕の理念を実践していくという目的を持つものである。会員の役割には、ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うこと、そして自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに応えることが含まれる」とあります。

異論もありましょうが、これを要するに、「有用でない職業はない。それぞれに価値があり、そこに貴賤の区別はない。自分の職業を天職と心得て、その職業に責任を持ち、誇りを持って」ということでしょうか。

こうした理念を世に問うた最初の出来事が、1915年の「**全職業人を対象とする職業倫理訓**」でした。11カ条から成るその目玉が、この「職業は天から委ねられた天職で、貴賤の区別はない」ということと、さらに大事なものは「営利行為の根底に友情を置くべし」ということではないでしょうか。

「商売の根底に友情を置け」とは、商売の相手方を心の友と思い、カモと思ってはならないということです。私た

ちが取引をする商品はもともとお客さまのものをお預かりしているので、時が来ればお客さまの要求に応じて、お客さまにお返しすべきものです。その時、「責任をもってお返しします、大事にしてください」と手を握り、それを契機として親戚同様の付き合いが始まるような心の交流が生まれることが理想です。

ロータリー哲学が常に磨かれてこそ、活動が生きる

このようにして、ロータリーは単なる社交クラブではなく、われわれの生活の糧である職業とは何だ、自分の職業は世のため人のためにどういう意味があるのかと「職業の意義」を模索し、ロータリアンとしての生きざま「ロータリー哲学」を追究し、その哲学を根底に置く倫理運動として成長してきたのです。全ての活動はその裏付けとなる思想なり理論なりが常に磨かれてこそ、その活動は生きてくるのではないのでしょうか。

では、どのようにして磨くのでしょうか。それは言うまでもなく、毎週1回の例会に出席して、親睦の中にお互いの発想を交換し、切磋琢磨して自分を磨くのです。その自己研鑽の心は、アーサー・F. シェルドン(1868～1935)によれば、「利己と利他の調和」ということでしょうか。その効果が電話の交換手から受付のお嬢さんにまで及んでいけば、その企業は栄え、儲かることはもちろん、その繁栄の効果は同業者を刺激し、ひいては社会を豊かにすることになるのではないのでしょうか。

ですから、他の同業者を見下すような言動は慎まなければなりません。同業者を疑心暗鬼にさせないような配慮を持って、自分の企業が繁栄するようになったノウハウも公開し、業界の智慧を高均質化し、そのエネルギーで、その業界と接触する全てのお客に幸せを与えることを念じたいものであります。

もっとも、ノウハウといってもすでに十分な慣行ができ

Annotation

*全職業人を対象とする職業倫理訓 原典は The Code Ethics for Business Men of All Lines、邦訳はいくつかあります。1915年のサンフランシスコ国際大会で採択されました。この中の全11カ条にわたる職業倫理訓は「(ロータリー) 道徳律」とも通称され、職業奉仕を考える際の古典的文献の一つです。

*『奉仕こそわがつとめ』1948年刊行の、パーシー・ホジソン1949-50年度RI会長によるロータリーの歴史的文献。

て、商品の販路を開拓したというものに関してであって、今研究中、あるいは試作中のものは公開できないことは言うまでもありません。

せっかく開発したノウハウを公開したら、自分の利益が少なくなると思われるかもしれませんが、自分の独創でノウハウを出せる企業と、人のノウハウを学んでフォローする企業との間には、克服できない落差がありましょう。

こうして業界全体の智慧が上がると地域社会は活気を呈し、豊かになり、自分の企業も潤うてくるというものではないでしょうか。

『奉仕こそわがつとめ』に篤農青年の話があります。彼は研鑽努力して優れたトウモロコシを収穫したが、その翌年にはその優秀な種を同業者に配布して、皆に良いトウモロコシを作らせ、業界の技術水準を向上させ、この地域を豊かにしました。同時に、自分のトウモロコシもその近所の良質な花粉を受精することによってさらに品質が向上したというのです。まさに One profits most who serves best. です。

「二針三針の奉仕」に見るロータリーの本質

職業奉仕の概念ができたのは1927年、実証されたのが1929年の世界大恐慌の時であったといわれています。ロータリアンの企業は、一社も倒産しなかったということです。その経験から得たものは、職業を営む上において、自分の職業に誇りを持つためには職業倫理を守らなければならない。職業倫理を実践することにロータリーの本質がある、という職業奉仕理念の再認識ではなかったでしょうか。

昔、アメリカのニューヨークにジョン・ハンネーという靴屋があったといえます。彼は同じ弟子仲間の一人とほとんど同時に、しかも軒を並べて靴屋を開業しました。1年ほどしますと、隣の靴屋は叔父さんから思いも寄らぬ遺産を譲られてにわか金持ちとなり、ハンネーの店の何倍もの大きな店になりました。

ハンネーは焦りました。しかし彼はいら立つ心を抑え、「何もそううらやむことはあるまい。一生懸命やれば私だっ

てやがて大きな店を持てるようになる」と腹を決め、今後の自分の仕事の方針を考えました。「靴を作る時、手間を省くようなことは一切やるまい。のみならず二針三針の手間を靴ごとに添えていこう。そうすれば靴の履き心地も良く、長持ちするようになる。そんな自分の作った靴はこれだというものを作っていった。最初は気付かれなくても、やがてお客さんが分かってくれば自然にお客さんも増えてくるだろう」と。

こうしてハンネーはあらゆる点に注意を払い、屈することなく、たゆまず努力を続けました。それから5～6年もすると、いつの間にか隣の店を通り越して、ハンネーの店にやってくるお客さんも増え、十数年もすると隣の店に倍する大きな店となり、アメリカ屈指の大靴店になって、業界をリードしたということです。

自分の職業である靴作りにおける二針三針の奉仕が、「良い仕事をしているな」と、彼の商品に有形無形の高い評価を与えることになり、信用という大きな財産を得て、大をなしたということでしょう。

このように、職業的・社会生活における奉仕の実践は、まず、自分自身が受益者になることによって、業界におけるランクも上がり、自信を持って業界をより良くリードすることができるようになるのではないのでしょうか。

本来、職業というのは私利私欲の追求ということで動いている行為ですが、儲けの金高で一喜一憂するのではなく、儲けを生み出す基になる考え方を、ロータリーは問題にするのです。

ハンネーは二針三針の奉仕をつけて靴と同時にお客の満足も売ったのです。だから彼は靴の代価を受け取る時、お金と同時にお客の感謝を受け取ったのです。そのプラスアルファが信用という積立貯金にもなり、お客との心の交流は、さらに店を繁盛させていったのではないのでしょうか。

職業奉仕は、金銭に集中しないこと

ポール・ハリスは「ロータリーの職業奉仕のことを一言で言えば、金銭に集中しないことである」と言っています。人間関係において金銭は、その終末処理の問題として避けられないものですが、その前に自分が世のため人のため、そして自分のためにどういう倫理的な義務を投下しようとしているのか、ということを考えよということでしょう。

こうして金銭を頂く前に相手を納得させ、自分も納得し、社会も納得するようなある種の労務の提供を心掛けるならば、私利私欲の追求がそのまま世のため人のためになる、とポール・ハリスは言うのです。

（第2740地区 長崎県 1995 - 96年度ガバナー）



日本のロータリーが継承する伝統を堅持する

岐阜RC 服部 芳樹

外国語から、外国語に翻訳された「職業奉仕」

この表題は、2016年に開催された第2630地区大会の決議である。むろん少数ではあるが、反対意見もあり、クラブの存在理念が二極分化することは当然で、これを否定するものではない。

「日本のロータリーが継承する伝統」とは何か？ その中核を成すものは、「職業奉仕」と「例会」であろう。

日本にロータリーが導入されると、先賢は“Vocational Service”に「職業奉仕」という訳語を創作した。太安万侶が口伝された『古事記』を記述した時、日本語には話し言葉はあっても、書き言葉は外国語である漢語（漢字）しかなくて苦労したと伝えられているが、ロータリーという英語の概念規定で説かれている「異文化異思想」から、それまでには概念規定になかった日本語に翻訳するに当たって同じ苦労を重ねられたに違いない。

職業奉仕の根本的な理念である「ロータリーの目的」の主文に説かれた「奉仕の理念（理想）」にしても、いわゆる思想的翻訳と捉えなければ、その真意を解明できないであろう。例えば、「決議23—34」の第1項が奉仕の定義として2010年規定審議会で認められたが、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる（One Profits Most Who Serves Best）」（国際ロータリー公式標語）にしても、もちろん「超我の奉仕」に至っては辞書的解明は不可能である。

当地区の職業奉仕委員会では、こうした語句などの解明の必要性に気づき、真言仏教徒であり、岐阜エトスロータリークラブ（RC）会員の北川宥智氏の協力を得て『ロー



来日中、岐阜公園を訪し「四つのテスト」記念碑に見入るハーバート・テラー氏（『友』1957年1月号 岐阜RC投稿より）

タリー語ときあかし辞典』（ロータリー文庫で閲覧可能）を編纂。その中で「超我」の出典を仏典に発見、初めて真意を学ぶことができた。先賢の思想的翻訳には、仏教思想に近似する解釈が多い。

職業奉仕の理念は、ロータリーが日本に導入された当時の会員の、「家訓」などにも見られる商道徳と一致していたことから、受け入れやすかったともいわれているが、「奉仕」のロータリー語としての解釈が「布施」で説明できることなど、先賢は意図的に、日本人になじみやすい仏教的概念規定を使って、英語という外国語から漢語（漢字）という外国語に翻訳されたのではないかとすら私は思ってしまう。そしてそれが、現在の日本のロータリーの伝統を支える哲理となっている。

ロータリーはどこにある？

「ロータリーはどこにある？」。長年これを、新会員研修の第一声としてきた。「ロータリーは、花を美しいと感じるあなたの心の領域にある」。そしてまた、創設のころ互恵団体であった時、その基盤となった「信頼、信用」を忘れてはならない。ロータリーはここに始まると思っている。「ロータリーの目的」の主文にもあるように、まず奉仕の理念があって、理想的にこの理念を五大奉仕活動の実践に移すことがこの集団の特徴ともいえよう。日々のロータリーは学問ではない。しかし、この在り方（理念）を知るための最低限の努力は必須であろう。

最近、国際ロータリー（RI）と日本のロータリーとの間で、職業奉仕に関して考え方の乖離が問題になっているが、「職業奉仕」という言葉には「理念」と「実践」両様の意味が含まれていると解釈すれば、ロータリアン

「決議23-34」第1項

ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—「超我の奉仕」の哲学であり、これは、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践的な倫理原則に基づくものである。

個々の生業^{なりわい}における理念の実践と、集団（クラブ）における職業上の才能と手腕を生かす活動は何ら矛盾するところではないと思う。職業奉仕によって得られた経済的繁栄や社会的地位あってこそ、より多くの貢献ができるロータリアンではなからうか。職業奉仕は、あらゆる奉仕活動の「根」である。

それにしても、このような大樹のごとき精神的支柱がなかったら、単なる人道奉仕団体に終始していたならば、慈善事業を行う社交団体であったならば、今日までにこのように人の心を引き付け、発展したであろうか？

「日本のロータリーが継承する伝統」のもう一つは例会である。1940年、日本のロータリーがRIから脱退せざるを得なくなった時、米山梅吉は「奉仕の理想をあくまで堅持したい」と述べたと伝えられる。私のクラブも「金曜会」と名を変えて、市内の百貨店の一室を借りて、1945年の空襲によって焼失するまで例会を続けた。四大奉仕活動が全て不可能になった時も、残ったのは例会である。信頼と寛容に基づく親睦が残ったのである。例会に出席できるということは、職業の健全、自分自身は無論のこと、家族の健康、そして温かく迎え入れてくれる仲間の笑顔があつての喜びである。それは、人生の「幸せ」と同義語である。私ごとながら、今理想としてきた「天寿退会」を目前にしている。

終わりに臨んで、「日本のロータリーの伝統」を堅持する方法は、日本のロータリーの伝承するところは、ポール・ハリス以来続いた「ロータリー精神の神髄」であるという

ロータリーの目的

ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。具体的には、次の各項を奨励することにある：

- 第1 知り合いを広めることによって奉仕の機会とすること；
- 第2 職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること；
- 第3 ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること；
- 第4 奉仕の理念で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること。

誇りを持って、クラブ細則に収録することであると強調したい。

嵐の中、九九灯が消えるとも一灯を守れば、再び「分かちて百灯となす」ことも可能である。

（第2630地区 岐阜県 2002 - 03年度ガバナー）

注）服部芳樹氏は2018年6月29日に逝去されました。

高良 明 著

『凡太の奉仕経営物語 ——ロータリー「奉仕の理念」を経営に生かす——』

国際ロータリー第2590地区パストガバナー高良明氏の力作である。全てのロータリアンの必読の書と言っても良いかもしれない。

公認会計士・税理士の氏は、1984年6月に川崎西ロータリークラブに入会。2006 - 07年度にはクラブ会長、16 - 17年度にはガバナーとして活躍された。

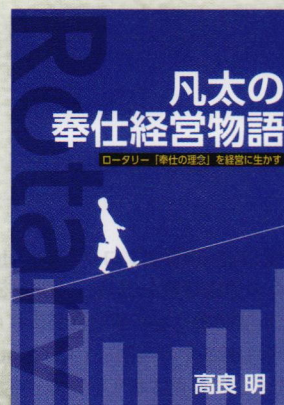
全編460ページに及ぶ大著であるが、ロータリーの奉仕の理念を経営に生かし、企業が強くなり、企業存続の知恵ともなるべきポイントを物語風にまとめてあり、大変読みやすくなっている。そして、氏の専門とする、企業を黒字経営にするための利益計画の立て方や予算管理の仕方、戦略的経営計画の重要性などを説く中に、氏の仏教経典をはじめとする東洋哲理や日本古来の実業倫理に対する深い造詣と

姫路RC 安平 和彦

洞察が随所にあふれ出ており、読者をしてロータリーの奉仕の核心にぐいぐいと引き込んでいく。氏は、「社会が真に求めるものをつかんで、己の使命により独自のものを創造し、これを世の中に奉仕していく。これが経営者の責務であり、生きがい

であり、企業存続の要諦と考えます」と結んでいる。

（第2680地区 兵庫県
2002 - 03年度ガバナー）



2018(平成30)年7月刊行
お問い合わせは、税理士法人
創新會計 高良もしくは小笠原まで
Tel 044-811-4111 (代表)
Fax 044-811-8678
メール a-takara@soushin.gr.jp

日本のロータリーは ガラパゴス化したか？

明石西RC 多胡 健吾

本誌 2017 年 1 月号（横組み P 14～17）に掲載された本田博己パストガバナーの論考『『職業奉仕』はロータリーの根幹か？』を巡る賛否が、いまだ議論されています。本田さんの『『奉仕の理念』の実践』を世界に向けて発信しようとの意見には賛成しますが、「日本の伝統的職業奉仕論が、日本のロータリーのガラパゴス化を招いている」は納得できません。なぜならば、「日本の伝統的職業奉仕」がロータリーの最も魅力的なところと考えるからです。私が理解している「日本の伝統的（古典的）職業奉仕論」は概略以下の通りです。

狭義の職業奉仕は「ロータリーの目的（The Object of Rotary）」第 2 項の理解と実践です。職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること。

これを実践するためには、例会に出席し、選ばれた異業種の会員と親睦のうちに情報を交換し、互いに教師となり生徒となり、切磋琢磨する。すなわち「より良き貴方、より良き私」を目指す、人間形成の場としての例会。米山梅吉は「例会は人生の道場だ」と言いました。「人づくりロータリー」こそ最大の魅力です。そこには新しい出会いがあり、生涯の友を得ることができるのです。

さて、広義の職業奉仕は「ロータリーの目的」全文です。主文「ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。具体的には、次の各項を奨励することにある」。

ここで「意義ある事業の基礎として」とあり、以下、全項目にわたり「職業人はいかに生きるべきか」という命題が示唆されています。原文では、職業として 4 種の単語（enterprise、business、professions、occupation）が使われ、Rotarian は単数形です。職業人であるロータリアン個人に、「かくあれ」と規範を示しているのです。私は

これに憧れて 53 年間、例会出席を続けました。ここには国際ロータリー（R I）、クラブ、人道支援という記述は一切ありません。

このように素晴らしい「ロータリーの目的」を持ちながら、1978 - 79 年度から R I 主導で 3 - H プログラムが開始されてから、ロータリーはその本質をなおざりにし、徐々にロータリー財団偏重に変わっていったと思います。人道支援の大義を掲げ、財団強化のための会員増強に走り、今や財団あつてのロータリーというありさま。また、2013 年の規定審議会では、いわゆる仕事をしたことのない人、または仕事中断中の人も正会員とするなど、会員資格の規定も変わりました。まさに、苦悩する職業奉仕です。

そして 2016 年のロータリークラブ定款第 6 条「五大奉仕部門 2.」の職業奉仕の箇所「自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに応えること」が追記されました。これは 1987 - 88 年度の R I 理事会が提出した「職業奉仕に関する声明」と同意です。

私の尊敬する故・佐藤千壽パストガバナーは名著『不易流行』で、この声明について「職業奉仕は実際に職業に携わる会員個人が、自分の職場で実践すべき奉仕の責任・義務ではありませんか。クラブが『職業奉仕を実践してみせる』とは一体なんでしょう。クラブは企業ではありません。また『クラブが開発したプロジェクト』とは何を意味するものでしょう。クラブが会員の事業計画まで指図できるのでしょうか。（中略）ロータリーの混迷はこの辺から始まったのです」と書かれています。

このように、ロータリーは年々変化していますが、世界のロータリーはどうあろうとも、「日本の伝統的（古典的）職業奉仕論（＝ロータリーの目的）」と「決議 23 - 34」は先達が残してくれた宝です。心して後輩諸氏に伝えていかねばなりません。

また、「ロータリーの目的」と「ロータリー財団の目的＝教育、人道的目的」をはっきり区別して考えなければいけません。後者は前者に従属するものであることは R I 定款、細則の通りです。人道支援（寄付）はロータリークラブに入らなくてもできます。（2680 地区 兵庫県）

Annotation

* 保健、飢餓追放および人間性尊重(3-H)補助金プログラム Health, Hunger and Humanity (3-H) Grants Program 国際理解、親善、平和を推進するための方法として人々の健康状態を改善し、飢餓を軽減し、人々や社会の発展を推進するプログラムで、国際ロータリーが 1978 年に創立。現在では、グローバル補助金や地区補助金がこれらの活動を支援しています。

* 決議 23 - 34 「社会奉仕に関する 1923 年の声明（1923 Statement on Community Service）」のこと。1923 年のアメリカ・セントルイス国際大会で採択され、以後の国際大会で改正されています。全文は友ウェブサイト、ロータリー手帳の付録に掲載しています。

金看板としての職業奉仕

会津若松中央RC 福西 宜孝

「職業奉仕はロータリーの金看板である」。この言葉は、職業奉仕がロータリーの基本理念であり、ロータリアンはそれを誇りにしていることを意味する。では、なぜ職業奉仕が基本となるべきなのか。私は、その理論的根拠を、次のように考える。

第1に、職業奉仕の宿命性。ロータリーは、主として職業人から成る団体である。職業人は、その職業に従事するに際し、必ず職業奉仕という問題に直面する。なぜなら、職業奉仕は職業を職業倫理^{のつと}に則^{したが}って行うべし、とする理念だからである。すなわち職業人は、職業を営む以上、「職業奉仕」に直面する宿命にあり、これから逃れられない。

第2に、職業奉仕の日常性。職業人は通常、休日を除いて毎日、職業上の仕事に従事している。すなわち、大半の職業人は、日常的に職業にいそしんでいる。これは、「職業奉仕」という問題と日常的に向き合わざるを得ないことを意味する。

それでは、社会への金銭の寄付、物的援助や労力奉仕によるボランティアはどうか。これらは、それに取り組むか否かは任意であり、「何人にも課された宿命的な課題」と

は言い難い。また、本人の金銭的余裕や時間的余裕がある時に、奉仕の意欲の高揚とともに取り組まれるべきことになろう。すなわち、必ずしも「日常的な奉仕との出会い」は生じない（例外はあるが）。

以上、職業奉仕は、奉仕の宿命性と日常性の2点において、他の奉仕と異なる。「全ての職業人」が「いや応なく日常的に関わる」という意味において、「基本的な奉仕」である。

ところで、世の人は次の①②のどちらを信用できる人と見なすだろうか。

①職業奉仕に日常的にいそしむが、その他の奉仕にはそれほど熱心ではない人。

②寄付やボランティアなどの社会奉仕を活発に行うが、職業ではグレーゾーンの利己的な金もうけをする人。

おそらく、社会的信用を得るのは、②の人より①の人であろう。本来、利己的な営みである職業を、世のため人のためという利他的要素と調和させようと苦悩する姿に、世間は「信用」というほうびを与える。

確かに、社会奉仕をすることで、大きな感動を味わうことができよう。しかし、社会奉仕という美しい花は、職業奉仕という木の幹から出た枝に咲いてこそ、より美しい。

(第2530地区 福島県)

職業奉仕は難解か

横浜港北RC 桑原 薫

「職業奉仕」と訳された Vocational Service (職業上のサービス)とは何か。日本でさまざまな解釈があるのはなぜか。以下は、その背景についての考察です。

「ロータリーのサービス」は幾つかの変遷を経て、その最終形「The Ideal of Service (奉仕の理想)」へとたどり着くのですが、変遷過程の「サービス」は大きく2つに分けられます。一つは会員や fellows (仕事相手と仕事仲間)へのサービスであり、もう一つはシカゴ市民や身体障害児などへのサービスです。

1922年に、どちらを「ロータリーのサービス」とするのかという大論争が起きたのです。なぜなら、前者は利益につながる「service」ですが、後者は無償の「voluntary service(奉仕活動)」であり、この二つが相反する関係にあるからです。基本的に「service」は有償で「奉仕」は無償ですが、カタカナの「サービス」が有償のときもあれば無償のときもあるために、日本において service と奉仕が混同されているわけです。正確には、service の理念(ギブ&テイク)では奉仕活動ができませんし、奉仕の理念(ギブ&ギブ)では事業活動ができないわけです。

そして、この大論争の着地点が、「奉仕の理想」と訳さ

れた「The Ideal of Service (サービスのお手本)」です。service と奉仕がどちらも TO DO (すること)なのに対して、これは TO BE (あり方)なのです。なぜなら、Ideal に定冠詞がつくと「お手本」すなわち「理想的なあり方」という意味になるからです。1923年、「ロータリーとはサービスの哲学である」と定義されたのはこのためです。しかも、このサービスの理念が、単なる奉仕の理念(ギブ&ギブ)ではなく service の理念(ギブ&テイク)であるからこそ「事業の基礎として」成立するのです。

以上のことから、「service = 奉仕」だと誤解したことが、「職業奉仕」を難解にした正体だと考えることができます。つまり、1927年の Vocational Service を「職業奉仕」と訳したことで混乱が生じたのです。

また、「ロータリーの綱領(現・ロータリーの目的)」の第3項(「ロータリアンすべてが、その個人生活、事業生活および社会生活に常に奉仕の理想を適用すること」)が1923年の「決議23-34」における Community Service (社会奉仕と訳されている)の定義であることと、この「社会奉仕」が1927年に三分割されて三大奉仕となり、翌年に国際奉仕が追加されて四大奉仕になった経緯を鑑みると、「職業奉仕とは、ギブ&テイクの理想的なあり方を事業生活に適用すること」だと考えることができます。

(第2590地区 神奈川県)

職業奉仕の精神を若者に

ロータリアンがお手伝い 社会とつながる第一歩

第 2750 地区インターンシップ委員長 伴 よし子 (東京港南マリンRC)

2007年、坂本俊雄ガバナー(当時)と東京都教育委員会とが話し合い、高校生の職場体験を目的とした事業が発足。それに伴い、地区インターンシップ委員会ができました。以来、地区内ロータリアンの企業に、生徒たちを受け入れる形で実施されています。

委員会が発足した当時、参加生徒は約400人。地区内クラブの例会に行き、インターンシップ事業について説明しました。生徒を受け入れる企業にとっても、社会に貢献することで企業のイメージアップが図れたり、生徒と一緒に仕事をすることで、従業員のモチベーションが上がるなどメリットが多く、徐々に協力を申し出るロータリアンの企業が増えていきました。今年度は7～12月に実施しましたが、都内9校、約1,300人が参加しました。

インターンシップ委員会の主な活動は、生徒の職場体験のアレンジです。インターン受け入れまでの流れは、まず、都の教育委員会から各都立高校へインターンシップの募集を行います。原則、1年生を対象としています。学校側は授業の一環として生徒に職場体験希望者を募り、その中から先生が選びます。そして、インターン

シップ委員会との話し合いにより受け入れ企業を決定します。

企業1社に2～5人、多い企業で10人のインターンが派遣されます。一日9～17時の勤務時間で、2



～4日間実施されます。1年生の時の職場体験がとても良かったということで、2年生になっても体験したいという生徒も増えています。

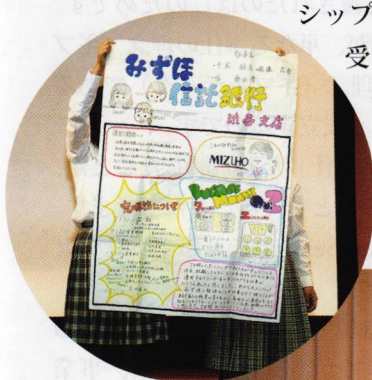
インターンが学ぶのは、まずはあいさつと返事。そして社会に受け入れられる人になるよう、他の人たちとの協調や協働の気持ちを養い、社会生活を送る上でのマナーなどを学びます。職場体験をした生徒からは、「大変貴重な経験ができ、自分自身の将来の選択肢の一つとなりました」と好評でした。

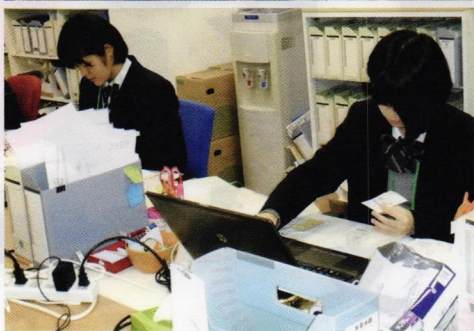
受け入れ企業のロータリアンからは、「生徒はまじめな態度で実習に臨み、真剣に業務をこなしていた」といった好意的な意見が多く寄せられました。職種によって多少感じ方に違いはあるにしろ、「生徒たちが体験を通じて、自分の将来への考え方に何かしらヒントを得ている」という実感があったそうです。

2018年6月には、東京都教育委員会と地区インターンシップ委員会で、インターンシップ10周年記念式典を東京都庁にて開催しました。約500人が参加し、生徒がインターンシップで体験したことを発表。モニタースクリーンを使う生徒や、大判用紙に手書きした資料を使う生徒など、アイデア満載の発表方法で、元気でハキハキとした口調で体験談を語りました。生徒たちが趣向を凝らして発表する姿はとても新鮮で、未来を見据えた瞳が印象的でした。

インターンシップ委員会は、若者の明るい将来の道しるべとなるよう、力を合わせて着実に一歩ずつ前進していきたいと思います。

(東京都)





インターンシップを体験した生徒たち

都立芝商業高等学校 2年 関 優花

私は1年生の時に(株)白洋舎東京支店でインターンシップをしました。そこでは多くの貴重な体験ができました。普段は見ることのできないクリーニングの細かい作業工程や職人さんの技術を間近で見たり、作業の一部を体験したりしました。

実際に職場の雰囲気味わって、学校では学ぶことのできないことを学べたと思います。この体験で何より印象に残ったことは、働いている皆さんがお客様に喜んでもらえるようにと、一生懸命に作業する姿をさまざまな場面で見られたことです。

今回のインターンシップを通して、私にとって働くとは追求することなのではないかと考えました。利益を追求する人、やりがいを追求する人、技術を追求する人など、人それぞれ求めることは異なりますが、自分が達成したいと思うことに向かって努力できることこそが働くことなのだと感じました。

都立深沢高等学校 2年 仁平 安紀

私は、ホテルニューオータニで職業体験をしました。もともと、経営や接客業にとっても興味があったので、体験できると聞きうれしく思いました。

2日間のインターンシップを通してさまざまなことを学びました。特に接客時の言葉遣いやテーブルマナーは、将来社会に出た時役立つことなので、勉強になりました。また、食事の配膳の仕方も体験しました。ホテル内の見学をした時には、展望レストランやスイートルームにまで入らせてもらいました。ホテル内はどの場所もきれいに保たれていて驚きました。

私は将来大学で経営学を学びたいので、今回の体験で、なりたい自分に近づけたのではないかと思います。このような貴重な体験ができるのは、先生方や受け入れてくださった企業があつてのことです。感謝の気持ちと今回学んだことを忘れず、今後の生活に生かしていこうと思いました。